

地球環境と民話

0. はじめに

私が、現在すんでいる神奈川県に真鶴という小さな岬があります。漁港のある小さな湾を抱えるように、海に向かって伸びています。私は、中国や韓国から友人がやってくると、よくこの岬を訪れて、食事をするのですが、その時の楽しみが2つあります。

ひとつは、美しい海を見せることです。この岬の先には、三つ岩という大きな岩があり、岩のあいだに注連縄（しめなわ）がはってあります。この岩を見下ろす崖の上にたつと、どこまでも青い海が広がり、そのなかにぽつんと浮かぶ漁船が時おり網を引いています。（写真 01 三つ岩の注連縄）



岬を訪れる2つ目の楽しみは、原生林を歩くことです。真鶴岬の先端は、さほど大きくありませんが、樹木の宝庫です。この森の木々は、思い思いに枝をのびし、好きなようにのんびり暮らしています。



最近、といっても20年ほど前からのことでしょうか、この森が「漁場保護林」として国の指定をうけて、保護されることになりました。岬の木々が、水をたくわえ、土を養い、微生物たちと共生しながら、プランクトンをはじめとした豊かな恵みを海にもたらすことが、分かりはじめてきたのです。（写真 02 漁場保護林）

この豊かな自然は、どのようにして守られてきたのでしょうか。それは、多分、岬の中ほどにある山の神社と貴船神社という2つの小さな社が、岬の人々の信仰を集めてきたからだと思うのです。日本の各地には、社（やしろ）にいついた鎮守の森がたくさんあり、この小さな森たちが、日本の自然を守ってきたことは、よく知られています。真鶴の貴船さまも、海の神様ですから、三つ岩の注連縄のあたりが結界で、神様をお迎えする大切な入り口であろうと思われます。岬の先端から貴船神社のあたりまでは神の森で、人が立ち入り木を切れば祟りのあった場所であったはずです。（写真 03 山の神社）



真鶴は、私のフィールドではありませんから、正確な調査をしたことはありませんが、そのような「神の森の木を切って祟りをうけた話」を、私は、各地で聞いたことがあります。真鶴岬の人たちは、この森が、まさか自分たちの生業である漁業を守ってくれるとは気がつかなかったはずですが、森の木々をまもり、結果として豊かな漁場を守ってきたのです。(写真 04 貴船神社の祭り)



日本の各地に残された素朴な信仰と、それにまつわる伝承の語りは、このように知らず知らずのうちに、私たちにとって大切な環境を守ってきました。今日の「地球環境と民話」というテーマは、一見奇抜に見えますが、そこには伝承の本質に根ざした問題がいくつも隠されているように思われます。そこで、これをもう少し理論的に、「民話学」という枠組みのなかで問い返してみたいと思います。

1. 公害を告げる河童の話

伝統的な昔話りの場で、昔話や伝説が、直接に「環境保護」や「生態系の維持」の大切さを訴えることは、まずありません。しかし、最近、身近におこった出来事を語る「世間話」のなかには、環境破壊に警鐘をならし、環境の保全を訴えるメッセージを含んだ話が、時折、見られます。その中でも、よく知られているのが「公害を告げる河童」の話です。

それは、福井県大野郡和泉村で、児童文学者のかつお・きんやさんが聞いた話です。

「村の人たちは河童が悲しい声で『川の水を返してくれ、水がおとろしい（恐ろしい）』と訴えるのを聞きます。不思議に思って川（九頭竜川：くずりゅうがわ）を見に行きますが川は青く澄んで何の変わりもなく流れています。ところが河童は『もう住んでおられん』『あの川の水はお前さんらにもようない（良くない）はずじゃ』と言ってきます。村の人たちもうるさくなって、しまいには邪険にあつかうようになりました。すると、ある夜、河童たちは激しい雨のなかをよろよろと山へ立ち去ったのです。

それから2年たった。村の人たちは河童のことをそれっきり忘れていましたが、川下へ働きに行った折、方言研究にやって来た学生と知り合い、河童の話をしました。学生はその時はなにもいいませんでした。一月ばかりして県から村長がよびだされました。九頭竜川がカドミニウムに汚染されているというのです。これが、河童のことを学生さんにしたことがきっかけだと聞いて村の人たちはいまさらながらに河童に申し訳なくて、山へ登りました。『河童よう、お前のおかげでわしらは助かった。ありがとうなあ』すると、霧の奥からかすかに答える声がしました。『百年したらもどってくるさかい、それまで川をきれいにしておいてくれえ』

河童は、水の神の零落した姿であると、民俗学の研究者はいいます。日本の各地には、東北から沖縄まで、河童と人間の交渉を語る話が、さまざまに語り伝えられています。そ

の多くは、河童が人に魚を届けてくれたり、傷薬の作り方を教えてくれたり、たいへん役立つしてくれるのに、人間の側のほんの不注意で、河童との交渉は断たれてしまう話です。そういえば、この「公害を告げる河童」の話も「人間には分からない秘密を教えてくれる河童」と「河童の善意に無知な人間」という河童話の伝統的な構造を踏まえています。川や木には、水の精や木の精がすんでいて、精と人間の間には犯してはならない約束があるのに、人間が自分の都合で約束をないがしろにして、自然との関係をこわしてしまう。こうした基本構造の話群に、「環境破壊」という新しい視点をこめて語る話者や記録者が登場したということでしょう。そこには、語りをとりまく環境の変化とともに、語り手たちと記録者たちの意識の変化があるのではないか、と思われまます。

2. 伝統的な語りと環境

伝統的な語りのなかに、「環境保護」という明確なメッセージをもった話は、確かにありません。しかし、よく考えてみると伝承の昔話そのものが、「伝統的な暮らしを支える環境の大切さ」を伝える機能をもち、「伝統的な生活に必要な環境」の保全を訴える、隠されたメッセージを含んでいることが分かります。ことに、昔話の優れた語り手の話には、私たちが忘れかけている伝統的な暮らしの細部が、じつにきめ細かく織り込まれています。

たとえば、日本の福島県の語り手、遠藤登志子さんという優れた語りの語る「大歳の客」という話は、こんな風に語りはじめられます。

「むかし、むかし、それあったと。ある里に、歳の暮だとゆって、みんな一生懸命かせいでいたそう。まあず年の暮というのはせわしいもので、煤は掃かなんねえ、餅やつかなんねえ。山さ行って若松いただいてきて、門松たてなんねえ、障子は張り直ししなんめえし。そうであ、長者どんの家では八つの竈にみんな火がへえって、でかい囲炉裏には、かだ木はぼんぼんと燃えて、庭では若え者が餅いつくわ、上がり縁にはでかい伸し板おいて、婆さまから姉さまから餅いまるめて。神棚ではそれ、旦那どのが神棚かたして、次の日の用意しなんねえ。まあそのうちに雪は降ってくるわ、『そうれまあず雪の積もんねえうちにかたづけろ』と語って、若い者でかい声でどなりつけるわ。おかつあまは、おかつあまで、姉さまから婆さまから、それゴンボは切っちゃか、芋は煮えたか、ほれ明日のおつけの用意はできたかとゆって、わたわたわたと、あっちゃあ跳ね、こっちゃあ跳ね、まずまず忙しい按配であった。」(←共通語版 p.6 参照)

そうして働いているところへ、行き暮れて、乞食が訪ねてくるのです。

「大歳の客」は全国各地で語られています、これほど過去をぎっしり詰め込んだ語りは、ほかにはないと思います。

伝承の語りは、いつも遠藤さんのように豊かな世界をもつとはかぎりませんが、優れた語りはかならず生活の細部を語りこんでいます。それは、糸つむぎや、機織、畑仕事のような技術であったり、その日その日の食事や着る物であったり、旅や年中行事や出稼ぎであったりさまざまですが、いわば失われつつある伝承の暮らしの記憶です。

それは、たいそう古ぼけていて、使い物にならないようにもみえますが、一方で、現在とは違った価値観や、時間・空間感覚を示してくれます。それは、現在、私たちの生きている世界を、もう一度見直す手がかりとなる「もう一つの世界観」であるように思われるのです。

私たちの生活する近代市民社会は、20世紀の終末をむかえたとき、一挙に加速して、ベルリンの壁まで破壊して、市場原理の一円支配と、グローバル・スタンダードの時代に突入したように見えます。

わたしは、それはそれで結構なことだと思いますが、人間同士の激しい競争のなかで忘れられかけてしまったものの見直しや、時代を批判する眼が、どこにあるのかが気になります。環境と人間が、加速度的な進歩のなかで、調和と均衡を崩しかけたとき、軌道修正をせまる視点が必要です。

伝統的な語りの世界に紡ぎ込まれた生活の細部は、人間と自然との穏やかなかわりや、かつてのゆったりとした時間の流れを思い起こさせてくれるのではないのでしょうか。優れた語りの細部のモチーフには、失われつつある民俗の知恵が隠されています。

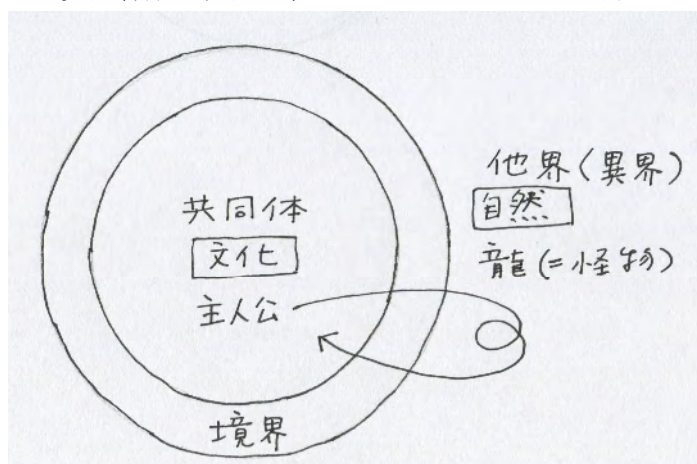
3. 民話の語りの構造と自然の治癒力

つぎに、伝承的な語りの構造そのものにも思いをいたしてみましよう。

民話の構造自体にも、「環境を考える契機」はないのでしょうか。

民話を研究する者なら誰でも知っているとおりに、ウラジミール・プロップは「民話の形態学」のなかで、本格昔話の中核となる魔法昔話に言及し、そこにはたった一つの構造しかないと主張しました。私にはプロップのこの主張が、とても魅力的に思われます。

この主張を私流に言い換えるなら、「魔法昔話とは、主人公が他界に出かけて行って冒険を重ね、象徴的な死をくぐりぬけて、中心としての王国に帰還し、支配者となる物語」であるということになります。(図 05 民話の構造)



これをさらに言い換えれば、中心とは「文化の領域」であり、他界とは「自然の領域」であるといえるでしょう。魔法昔話とは、衰退した文化から脱出した主人公が、自然のなかで自分を取りもどし、文化を活性化する物語とも読めます。

たとえばグリムの「二人兄弟の竜退治」では、竜に脅かされた町は、なす術もなく、黒い旗を掲げて死を待っています。そこに訪れた主人公は、森の動物たちの力を借りて、竜を倒し、町を解放し、新しい王になります。死に瀕した町(=文化)は、自分の力だけで

は自分を癒すことができません。死に瀕した文化が再生するためには、外側の自然の力が必要なのです。

「地球環境と民話」というコンテキストでいうのなら、文化はつねに周縁的な自然に取り囲まれており、自然との関係を失えば死滅する。文化を活性化するのは、つねに荒々しい自然であるということになります。

民話は、いつも、中心となる文化を活性化するためには、外側の自然の力との交渉が必要であると説いているのです。

4. 語りの継承と「新しい語り」の創造

伝統的な語りは、構造的に「自然」をはらんでいます。この自然は、日本の民話でいえば、鬼であり山姥であり、主人公に敵対的な妖怪たちの住む世界です。「公害を告げる河童」に登場する河童も、本来は人間に敵対する妖怪の代表でもあります。

韓国の昔話では、トケビや鬼神がこれにあたるはずです。

しかし、ここで注目すべきなのは、自然のなかには、人間が容易にもつことのできない知恵、たとえば「公害を感知する力」があることです。プロップがすでに指摘したように、自然を代表する妖怪たちは、同時に主人公を助ける「援助者」であり、大切な知恵をさずける「贈与者」にもなることができます。

たとえば、日本の民話「梨とり兄弟」で、山に入り不思議な力をもつ梨を求める主人公に「笹の葉のそよぐ声をよく聞いて、声に従え」と教えるのは山姥です。三人兄弟の上の二人の兄は、この指示を聞かず、自然の力を無視して、梨を守る怪物に食べられてしまいます。これに対して山姥の言うとおりに、笹の声に耳を傾け、自然の声に従った末の弟は、見事に池の主を退治し、梨を手に入れます。山姥は「笹の葉のそよぎ」という自然の声を聞くようにと教え、自然の声に従った主人公が、敵＝荒ぶる自然にうち勝つのです。

民話の優れた語り手たちは、多くの場合、こうした自然のメッセージに対して、きわめて敏感で、自然をおそれながらも、自然の教えをたよりに、自然にうち勝ち、自然から豊かな実りを引き出してきたかのように思われます。伝統社会の語り手たちは、語りのなかに民俗の記憶と知恵をこめて、聞き手たちに送り届けつづけてきたのだと思います。私たちは、すでに土間や囲炉裏という伝統的な語りの場を失い、語りをとりまく自然を失いつつあります。近代化によって均質化された時間と空間のなかに育った現代の語り手たちの多くは、便利ではあっても自然との「ほどよい関係」を見失い、新たに「環境破壊」という難問と対峙しなければならなくなりました。

語りの場は、囲炉裏端ではなく、学校や保育園、あるいは劇場にかわりました。こうした新しい語りの場で語る「新しい語り手」たちは、もはや伝統的な語り手たちが保持していた自然の力を失いつつありますから、いっそう自らをとりまく環境の変化に感覚をとぎすまし、「環境を意識した語り」を生み出していかなければならないのでしょうか。

しかし、同時に、民話が本来身につけている自然の力を信頼して語るが必要とされ

るでしょう。たとえ時代はかわっても、自然を内にはらんだ民話の構造は変わらないというのも事実です。「現代の民話」に時代のメッセージを聞き、伝統的な民話のなかに込められた民俗知をすくいとり、さらには民話が構造的に内包する自然の声を聞くことが、私たちの時代の新しい語り手には求められているのだと思います。

【参考】「大歳の客」共通語版

「むかしむかし、ある里では、年の暮れだから、みんなで一生懸命働いていた。年の暮れというのは忙しいもので、煤（すす）は掃除しなければならぬし、餅はつかねばならない。山からは若松（松の枝）を切って来て、門松を立てねばならない、障子は張り直ししなければ、ならない。長者の家では八つの竈にみんな火が入って、大きなイロリには木が盛んに燃えて、庭では若者が餅をつき、板の間には大きな餅をのせる板をおいて、婆さんから娘まで、みんなで餅を丸めていた。主人は神棚を掃除して、次の朝の用意をする。まあ、そのうちに雪が降ってきたので『雪の積もらないうちにかたづけろ』と言って、若者を大きな声で、どなりつける。主婦や、娘や、婆さんが、牛蒡（ごぼう）を切ったり、芋を煮たり、明日食べるご馳走の用意をして、あちこち走り回り、まずまず忙しい様子であった。」